

1 平家物語(卷第十)の「藤戸」

謡曲「藤戸」は、周知の通り平家物語の卷第十「藤戸」の段に語られる佐々木盛綱の先陣功名譚を素材にした作品です。

興味深いのは、原典に当たる平家物語の「藤戸」の段では、この源平合戦の逸話が佐々木盛綱の手柄話として賞賛されて語られているのに対して、謡曲「藤戸」では、佐々木盛綱に馬で渡ることの出来る浅瀬の存在を教えたにもかかわらず、盛綱の功名心によつて無惨に殺害された漁民の青年の母(前シテ)を登場させ、息子を殺害した盛綱への恨みを語らせるところです。また後半には、殺害された青年の亡霊(後ジテ)を登場させ、その怨念を語らせ、劇の前半後半にわたつて、残酷な仕打ちをした盛綱に怨嗟の情を劇的に浴びせる構成にも興味が尽きません。

さて、この曲の作者は今のところ不明としかいえませんが、原典の平家物語の行間に埋もれていた人間の悲劇を、みごとに謡曲作品として掘り出してみせる文学的な才能に長けた人だといえるでしょう。そこでまず、簡単に原典である平家物語の内容を整理しておきましょう。

謡曲「藤戸」が典拠にした平家物語の本文は明確に確定することは出来ませんが、ほぼ覚一本(一方流)系統とよばれる室

町期(十四世紀)に広く平曲(琵琶法師の語る芸能)として親しまれた本文でしょうから、二応覚本をテキストとして引用しておきます。

元暦元年(寿永三 二八四)九月二十五日、屋島を本拠とする平家軍は、平資盛を大將軍として備前の児嶋(現在の岡山市児島半島)に陣取ります。一方、源範頼を総大将とする源氏軍は、そのことを聞きつけ対岸の藤戸に陣取ります。現在の地形では陸続きですが、この時代はまだ児嶋と藤戸は海で隔てられていましたので、騎馬軍の源氏勢には舟がなく、対岸で平家軍と対峙することとなりました。「海のおもて五町ばかりへだてたり。舟なくしてはたやすうわたすべき様なかりければ」と平家物語にありますので、源氏の陣営からは、五百メートル余り沖合に児嶋が見えていたのでしょう。仕方なく、平家軍はいたずらに日数を送っていたのでした。ところが、平家の陣営からは血気盛んな若い兵士達が小舟をこぎ出しては、「扇をあけて、『こゝわたせ』とまねきける」という具合に、挑発作戦にでるのでした。勿論、源氏の陣営には焦りの色が出ます。

平家物語の最も古い本文かと思われる延慶本平家物語には、この直前に「平家ノ方ヨリ海ノ底ニ六菱ヲ植ヘ蜘蛛手ヲ結テ陸ニ八軍兵ヲ居タリ」とありますから、この挑発行為は、挑発に乗つて児嶋側に源氏の騎馬軍を発進させ、海底の菱や蜘蛛手

にかかった源氏軍を舟に乗った平家の機動部隊が壊滅させるという作戦だったのです。

ところが、九月二十五日の夜、佐々木三郎盛綱は、土地の漁民の青年に衣類や短刀を与えてうまく信用させ、「この海に馬にてわたしぬべきところやある」と尋ねます。青年は、勿論その土地の漁民ですから海には詳しく、「河の瀬のやうなところの候が、月がしらには東に候、月じりには西に候」と教えてくれ、実は馬で簡単に渡れるということを告げるのでした。そこで、佐々木盛綱は、誰にも知らせずその青年と二人でその瀬を渡ってみますと、ほとんど背丈くらいの高さの瀬で、足の立たないところは少し泳げば児嶋にたどり着けるのでした。青年が盛綱にそれ以上近づけば危険であることを教えたので、二人は立ち戻りましたが、盛綱は、「下臈はどこともなき物なれば、又人にかたらはれて案内をもおしへんずらん。」と疑い、自分だけがこの軍事機密を独占しようとして、残虐にも青年を刺し殺し、首を掻き切つて捨ててしまします。

翌二十六日、平家が再び小舟で源氏勢に挑発をしたところ、盛綱は総大将範頼や味方の兵士の制止を振り切つて海に出撃し、先陣を切つたのでした。盛綱の渡海上陸を見た源氏軍は雪崩を打つように続いて児嶋に攻め入りましたから、平家はどうとう海上に退いたのでした。

平家物語は、この残酷なまでの盛綱の功名心を讃えて、「昔より今にいたるまで、馬にて河をわたすつは物はありといへども、馬にて海をわたす事、天竺三震且はしらず、我朝には希代のためしなり」とて、備前の児嶋を佐々木に給はりける。」と、頼朝から賞賛され、この土地を恩賞としてたまわつた盛綱を讃えています。

さて、中世の夜明けを告げる源平合戦の時代では、鎌倉方の源氏の武士達は、この戦に功名を立て、恩賞としての土地を獲得することが最大の目的でした。ですから、仲間に先立つて先陣を切ることや、恩賞のために敵をだますことなどはけつして不名誉なこと、あるいは卑怯なことではなかつたと考えられます。ですから、自分の低い漁民の命などは、盛綱にしては顧みる価値もないものであつたのかも知れません。いわば、戦場というのは非情さが尊ばれるのであり、人間的な情愛に目覚めることは許されるものではなかつたのです。それ故、戦場の中で、きらりと人間的な情愛が耀く逸話、たとえば熊谷直実と平敦盛の逸話などが人々の心を揺さぶるのであり、またまるでスポーツを観戦するような先陣争いの逸話が美しく描かれるのでした。

しかし、実際の戦場は、血で血を洗う修羅の場でした。先ほど少し触れました平家物語の古い本文の残る延慶本などの合戦譚には、私達が日頃親しむ語り本(平曲)の本文では見られない残酷な勝利の物語が語られています。いわば、平家物語の本文の動きの中でも、語り物の芸能には、討ち果たされた側に視点を移していくという不思議なヒューマニズムがあるのです。

謡曲の「藤戸」は、まさにこの語りの芸能の本質を平家物語本文にもう一度働かせたといえるでしょう。源平合戦の中で、まるで虫けらの如く海に葬り去られた青年の悲しみと怒りに焦点を当てて、彼の母親と本人の亡霊とを舞台上に登場させ、理不尽な武士の仕打ちを徹底的に暴き出し、合戦の功名の中

に埋もれた人間の生命のうめき声を私達に届けるのです。

しかし、この本文の創造はけつして平家物語本文から離れるのではなく、前節で引用した平家物語の言葉は、確実に謡曲「藤戸」に引き継がれているのです。作者は、確かに平家物語本文を下敷きにして、そのイメージをしっかりと利用しながら、新たな悲しみと怒りのドラマを創造しています。先に述べました原作にはけつして出ない母親を登場させることや、後半にその息子の亡霊が理不尽きわまりない殺戮で海に捨てられた無念を語ることなどは、平家物語を素材にしたいくつかの作品の中でも、この作品を際だって劇的にしています。

3 謡曲「藤戸」のおもしろさ

このような平家物語の行間に埋もれた悲劇を紡ぎ出すこの作品のおもしろさも、いくつか見ておきましょう。この作品は、先ほど触れましたように、前シテの老婆がこの土地に入った新領主としての盛綱の偽善を暴くところから始まります。

藤戸という地名を借りて、作品は春に咲く藤を連想させるような言葉から導かれます。そして、児嶋合戦の功名によって獲得した児嶋に領主として赴任するワキ佐々木盛綱が登場し、「皆々訴訟あらん者は罷り出よ」という触れを出させ、あたかも物わかりのいい領主のように描かれます。しかし、二度と戻らない人生の悲しみを漂わせたシテの老婆が泣きながら登場し、何事と驚く盛綱に向かって、罪もない我が子を殺害した盛綱の罪を告発します。

「なにとわが子を浪に沈めし恨みとはさらに心得ず」としらを切る盛綱でしたが、真実を暴かれかけると、「ああ音高し」と狼狽し始めます。そして、功名の陰に隠し続けた残酷行為を、老婆の悲しみの籠もった怨嗟の語りによってとがめられると、とうとう、「言語道断、かかるなることこそ候はね。今はなにをか包むべき」と、おそろく彼の心中に深く押し込めていたかつての行為を、老婆に息子の最期の姿として語るのです。この盛綱の心理の変化は実に面白く劇的に構成されており、平家物語の功名譚を再現する語りではありませんが、完全に懺悔の語りに変質しています。「取つて引き寄せ二刀刺し、そのまま海に沈めて帰りしが、さては汝が子にてありけるよな」という語りの結びは、心の深層にしまわれていた罪業の自覚が目覚めてきた盛綱の心の動きを巧みに教えてくれます。

作品が感動的なのは、この盛綱の語りの後、老婆に息子を殺害した現場を聞かれ、「あれに見えたる浮きの岩の、すこしこなたの水の深みに、死骸を深く隠ししなり」と告白する盛綱の語りと、「さては人の申ししも、すこしも違はざりけり」という息子の死を再確認する母の情との掛け合いです。ここには、息子を殺された怒りを殺害した男に投げつけても、さらに息子を亡くした悲しみが増すという母の悲しみも表現されています。

この世とあの世という二度と交われない別れの自覚の上に母子の愛情が表現され、また、あがなうことの出来ない罪が自覚される時にはじめて恨みを超えた心の交わりが感じられるという、中世の無常の悲しみがこの作品をさらに感動的なものにしていくといえるでしょう。

盛綱は、己が殺害した青年の母の悲しみに打たれ、青年の弔いを誓います。その情に惹かれるようにして後ジテである青年の亡霊が現れます。前ジテと後ジテとは別の人格ですから夢幻能ではなく、現在能の幽霊能のような演出が、また興味深いところでもあります。

この亡霊の語りにも、平家物語での盛綱賞賛の言葉はしっかりと引用されますが、しかし、「この鳥を御恩に給はるほどの、おん喜びもわれゆゑなれば、いかなる恩をも賜ふべきに、思ひのほかに一命を、召されしことは、馬にて海を渡すよりも、これぞ希代の例なる」と、平家物語での賞賛の言葉を巧みな皮肉に置き換えて、亡霊は盛綱の非情、すなわち中世の夜明けの闘いの陰に隠れた人々の命の重さを訴えます。

この世に残した怨念を語ることは、同時に鎮魂滅罪の行為でもありましたから、青年もやつのことで成仏がかないままに見る劇的な曲がここに終わるのです。

4 おわりに

謡曲「藤戸」は、右のように中世という時代の夜明けの光の中で、その日陰に隠されていた戦乱の生け贄達の悲しみと怒りとを、見事に舞台化したまれに見る名曲といえるでしょう。ここには、時空を越えて命の大切さ・重さといった現代的なテーマに通じるものさえ創造されています。いつの世も、戦争の直後は勝利者が讃えられますが、しばらくするとその犠牲者達の悲劇が伝えられ、戦争の真実が暴露されます。そういう意

味では、洋の東西を問わず、また歴史の時間を越えて、人間の愚かさは変わりないようですが、古典芸能の世界で、早くこうした人類史的な課題を演劇の空間で描いたことに、「藤戸」の芸術性は再評価されてもいいでしょう。

このような人間のテーマを、能面・能衣装を初めとして、さまざまな舞の型や謡の型によつて舞台化する仕組みにも興味がありません。悲しみを漂わせる老婆や、成仏を求めて苦しみ続けていた青年の怨霊の面などは、また造形芸術として眺めてみても、いろいろな知的刺激を与えてくれるでしょう。

そして、こうした伝統芸能、伝統芸術を守り育てる能楽関係者の方達の日々の稽古や努力にも思いを馳せて鑑賞していただきたいものです。